

まき網漁業とは

(海外まき網を除く)

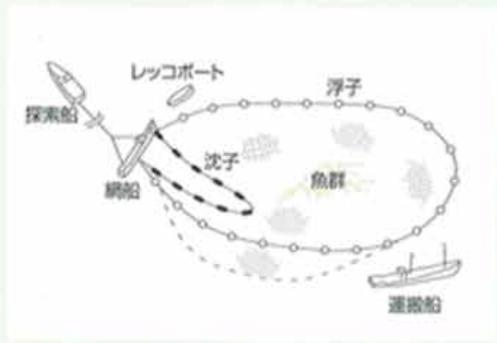
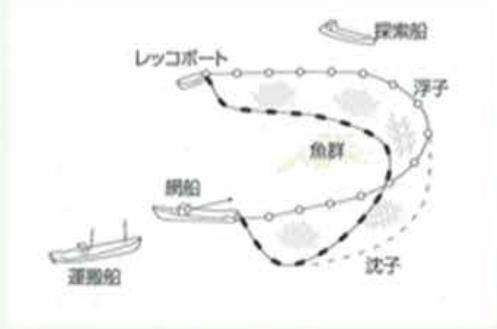
まき網漁業は、網船と付属船からなる船団で、我が国周辺の水域において、あじ、さば、いわし、かつお、まぐろなどの浮き魚を漁獲してる。

操業方法により、1そうまき、2そうまきがあり、集魚灯の使用が認められている場合もある。

大中型まき網漁業の船団構成は操業の方法、船の積載量(網や漁獲物)等により網船、探査船、運搬船、レッコボードの数隻からなっている。

さらに、近年は、経営改善、省エネのために船団構成を縮減する取り組みを進めている。

【1そうまき網】



(1) 魚群発見・投網

魚群の行動、風向、風力、潮流などを考慮して、魚群を網で大きく巻く。

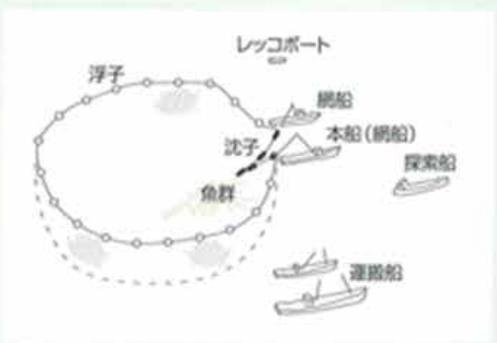
(2) 環締

沈子側につけてある環ワイヤーを引き締める。

(3) 揚網・積取り

網船や運搬船を支えるために探索船やレッコボードで裏漕(網の反対側に引く)する。運搬船を網に取り付け、三角網(モッコ網、アグリ網)で魚を数十回掬い上げ、水氷と共に魚倉に収容する。

【2そうまき網】



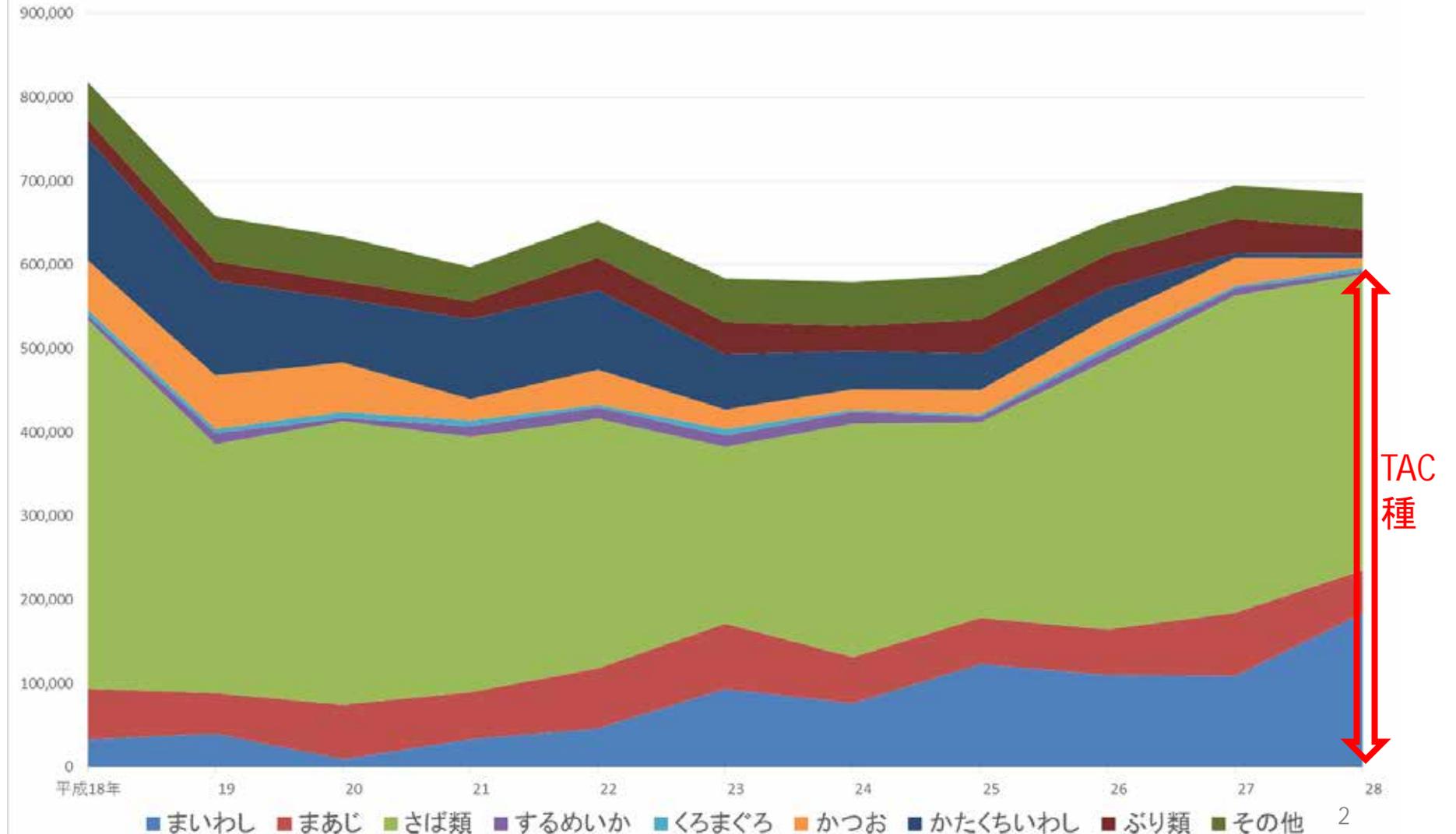
大中小型まき網の船団数は資源管理のための減船等により減少傾向にあり、現在約60ヶ統の船団が年間約70万トン（海外まき網除く）の水揚を行い、わが国漁業生産にとって最も重要な漁業のひとつとなっている。

大中小型まき網漁業の漁獲量のほとんどが（まいわし、まあじ、さば類、するめいか、くろまぐろ*）、TAC対象であり、TACを厳格に順守した操業を行っている。（*くろまぐろTACは平成30年から）

大中小型まき網漁業船団数の推移（海外まき網、19トン型を除く）

年	平成1年	平成5年	平成10年	平成15年	平成20年	平成25年	平成26年	平成27年	平成28年	平成29年
船団数	185	154	110	77	68	64	65	64	62	61

大中小型まき網魚種別漁獲量の推移（海外まき網を除く）



大中型まき網 漁業における 船団縮減の取 り組み

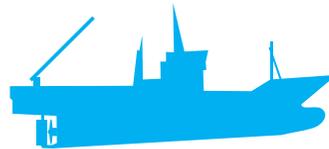
・5隻51名体制

2隻32名体制
に縮減

【現 状】5隻体制
網船×1，探索船×1，運搬船×3 乗組員51名

【改革後】2隻体制
網船兼運搬船×1，運搬船×1 乗組員32名

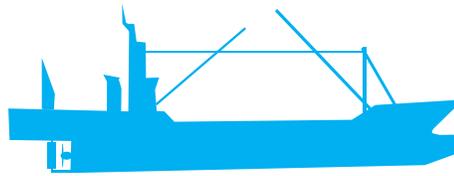
網船
135t型
(19名)



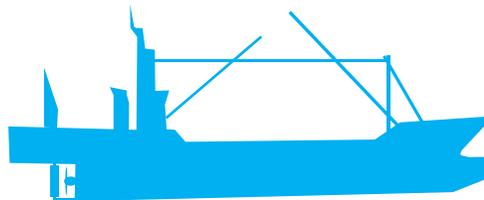
探索船
99t型
(7名)



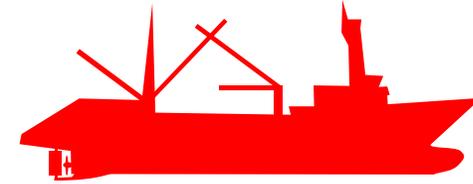
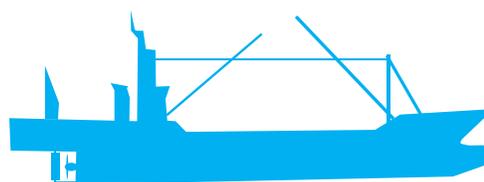
運搬船
317t型
(9名)



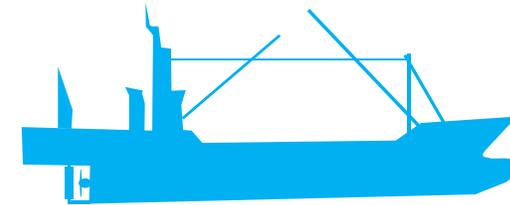
運搬船
286t型
(8名)



運搬船
242t型
(8名)



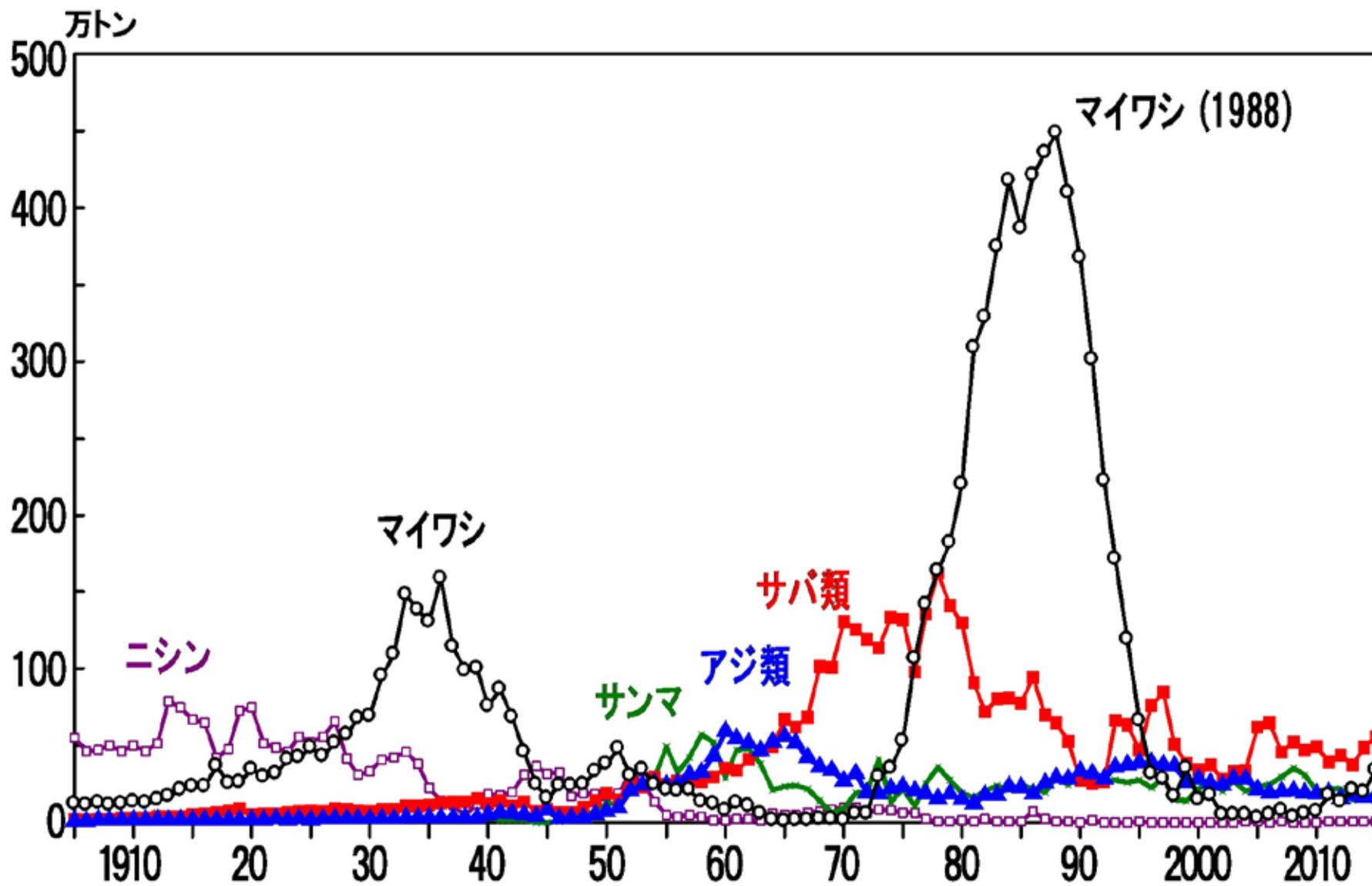
網船兼運搬船
330t型
(23名)



運搬船
370t型
(9名)

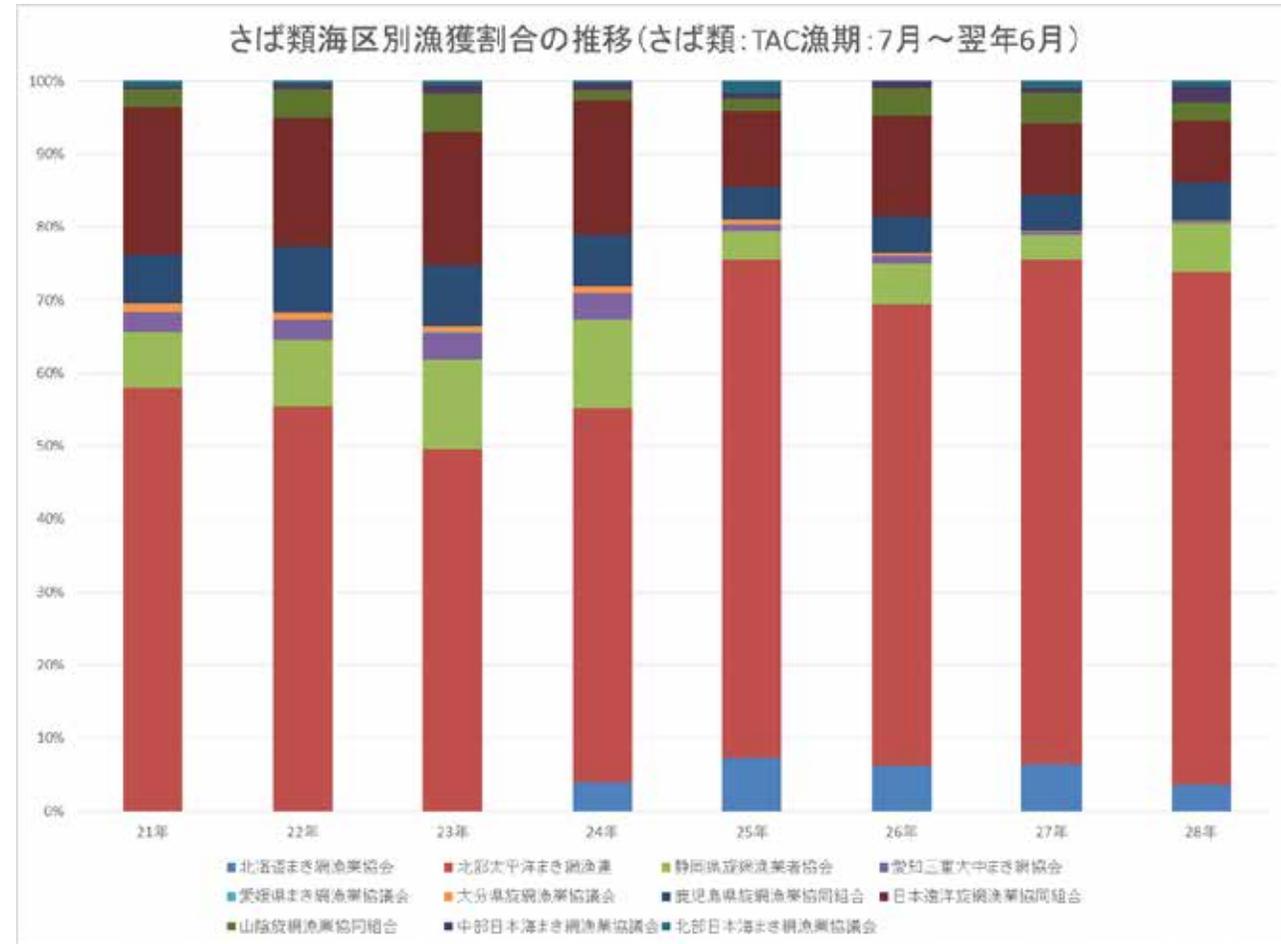
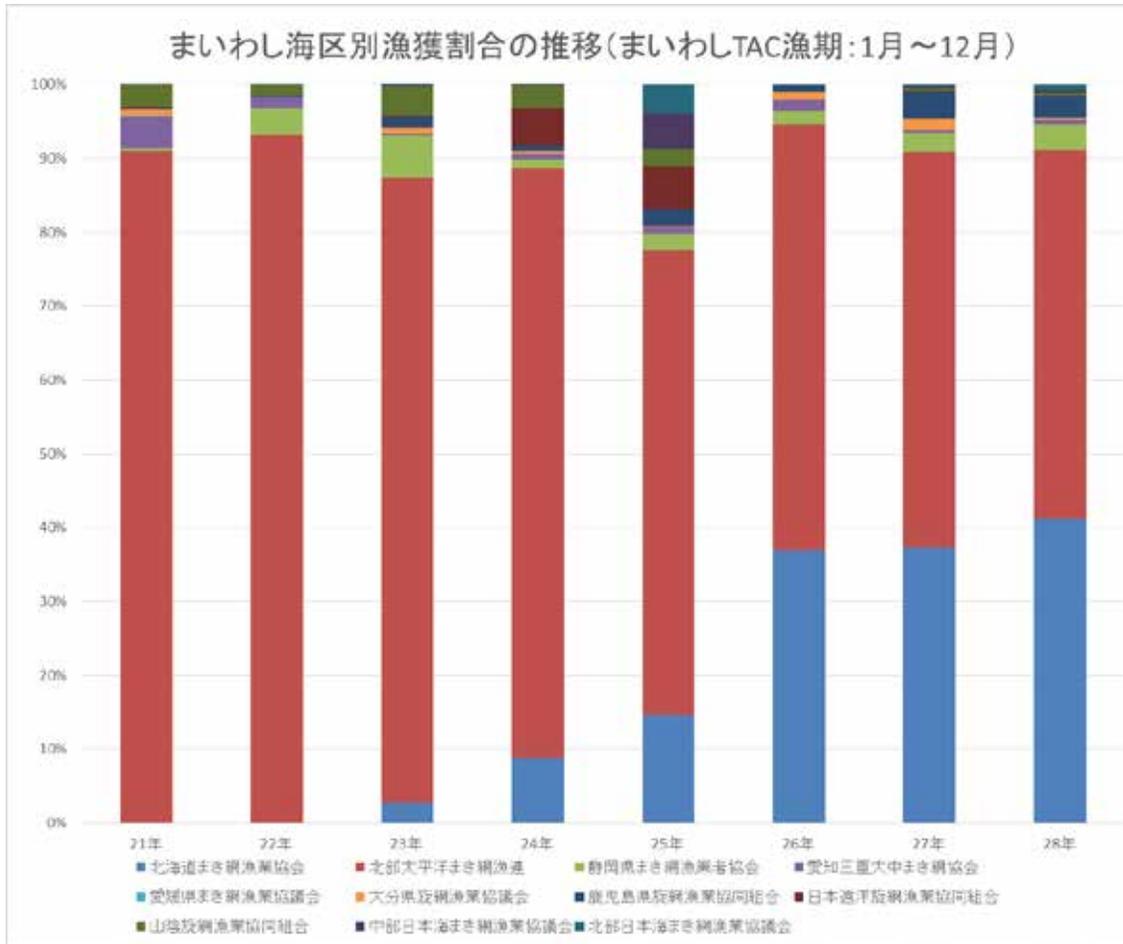
我が国周辺の浮魚は、

- ・資源量が、長期的な変動を繰り返すこと、
 - ・卓越種が入れ替る(魚種交替)こと、
 - ・資源の増減にともない分布域が拡大縮小すること、
 - ・大きな群れを形成すること、
 - ・北に索餌場、南に産卵場があること、
 - ・春～夏に索餌・北上回遊、秋～冬に南下・産卵回遊すること
- 等の特徴を持っている。



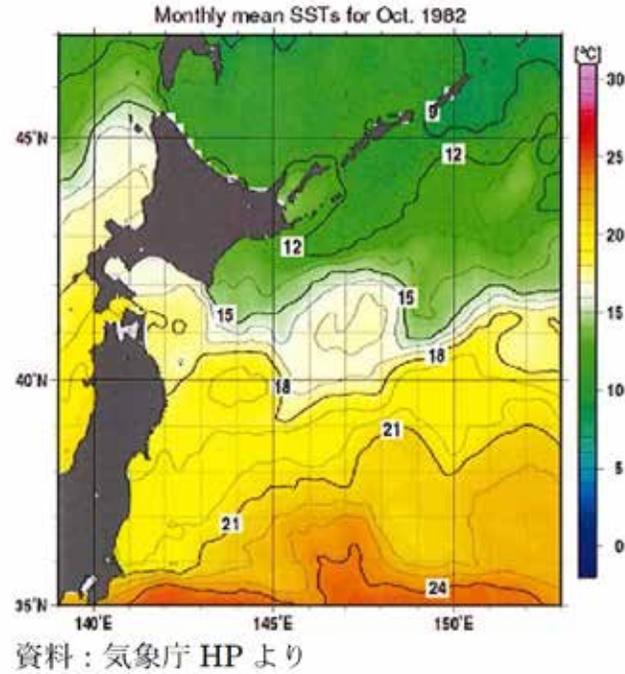
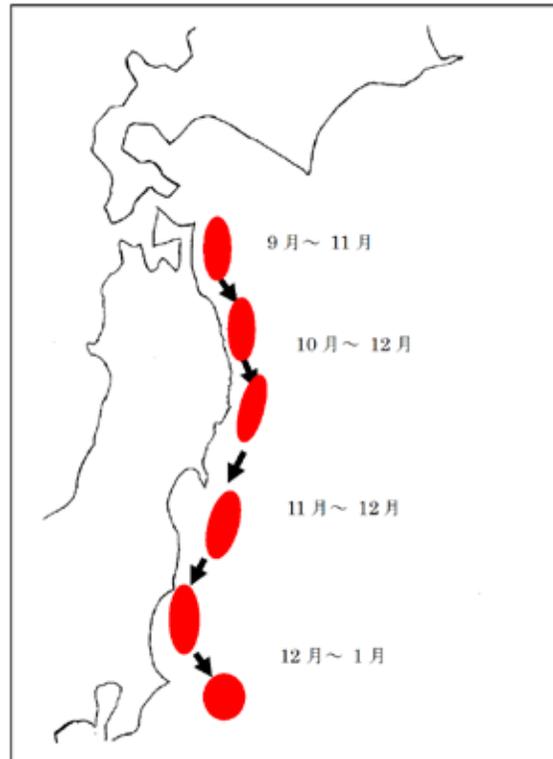
日本周辺の多獲性浮魚の漁獲量
(全漁業:まき網以外含む)

浮き魚類では毎年の漁場形成の変化に伴い、海区別の漁獲割合が大きく変動する特性を持っている。

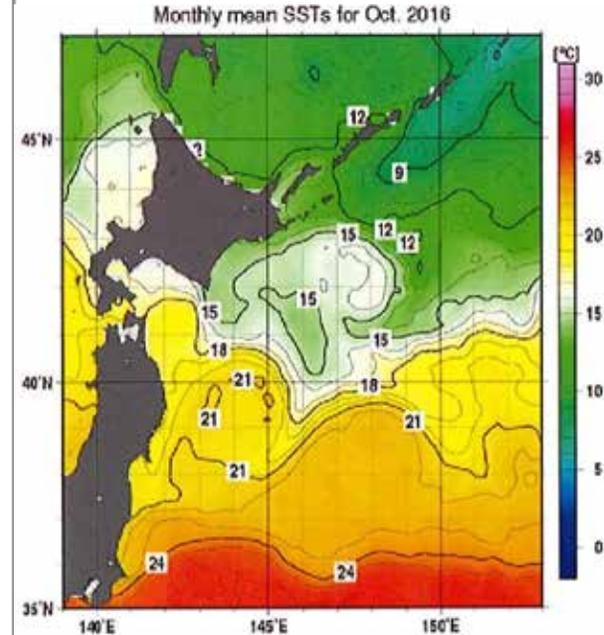
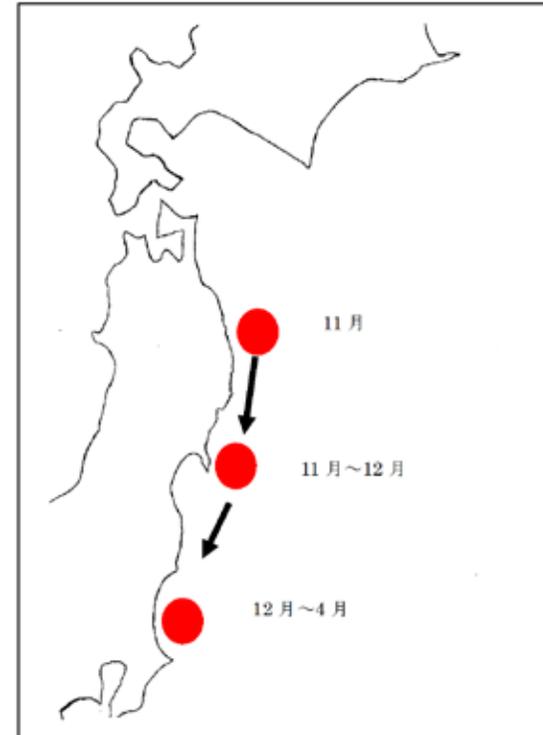


三陸、常磐沖漁場におけるさば類の盛漁期漁場形成パターンの変化

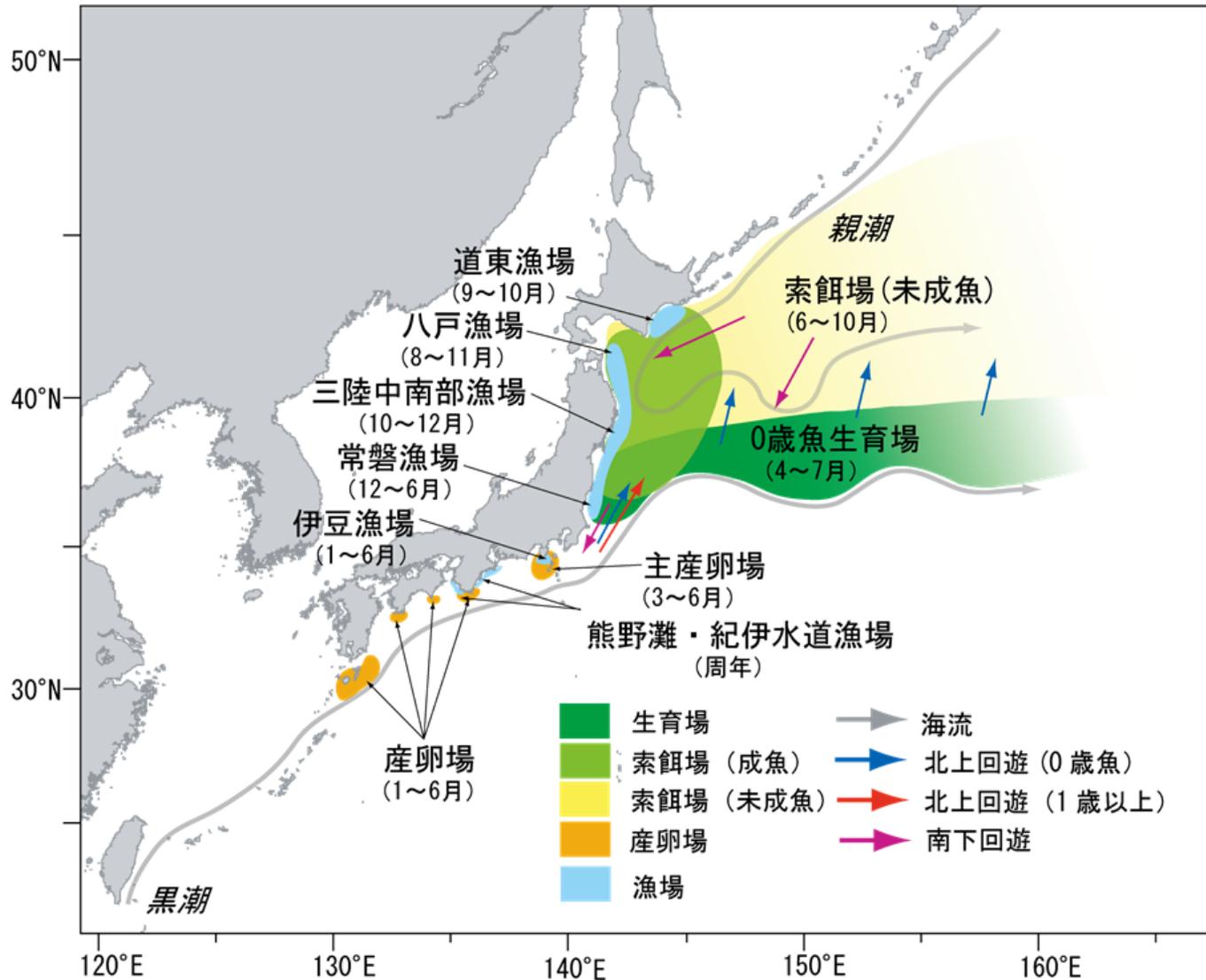
昭和50年代後半



平成28年

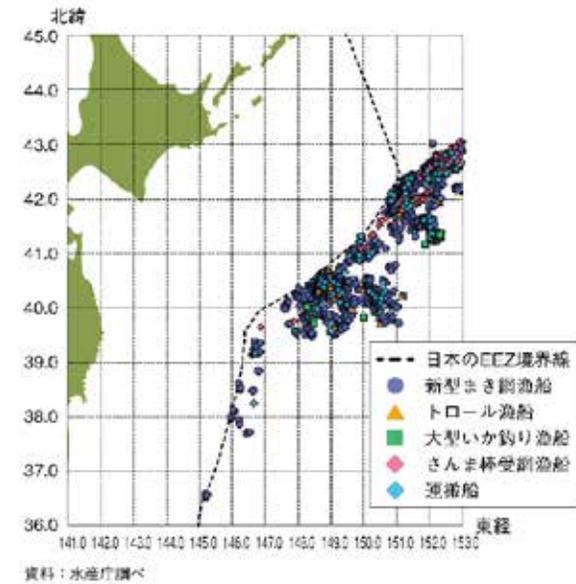


まさば太平洋系群 分布・回遊、生活史と漁場形成模式図
 (国立研究開発法人 水産研究教育機構HPより)



北西太平洋における中国漁船の視認状況
 (水産庁)

図 I-2-3 北西太平洋における中国漁船の視認状況



北部太平洋まき網漁業におけるサバ類の試験的 I Q 管理の流れ

